

## 法然浄土教の特質

### 一 はじめに

只今、ご紹介にあづかりました仏教大学の坪井でございます。光地先生の御言葉により、浄土宗の開祖法然上人のことについて、その研究の一端をお話し申しあげます。皆様方の御研究の参考にして頂けば幸いに存じます。

法然上人は平安時代の終りから、鎌倉時代の初めにかけて生存された方であって、道元禅師に先立ちますこと六〇年ほど前の人であります。法然上人の生誕が長承二年（一二三三）であり、道元禅師は正治二年（一二〇〇）ですから六〇数年の先輩ということになります。

両師の居られました社会環境を見ますと、法然二人は平安時代の貴族政権が崩壊して武家が政権をとり、鎌倉幕府がひらかれた政権交替の時代であります。この政権の交替は平和裡に行なわれたのではなく、保元の乱、平治の乱という骨肉あい喰む闘争戦乱と、平家一族が壇ノ浦で滅亡するという過程

を経て、武家政権が誕生しています。これは、法然上人が二十七・八歳の頃から五十三歳頃までの出来事であって、上人の壮年期にあたります。

道元禅師の時代は、法然より六〇年余り後になりますから、鎌倉幕府の政治体制も定まり、武家政治の安定した時代であります。それで両師の間の社会背景に大きな相違が見られます。

とりわけ、法然上人の居られました京都の地は、平安末期の争乱の中心地でありましたから、その惨状を目のあたり見られたことと思います。この争乱は、一家一門のもの、血を分けた親子、兄弟が権力闘争のために敵味方に別れて戦かうという誠に惨い痛ましい争いでありました。それが京都を中心として行なわれ、そこに法然上人が住していられたのですから、幕府政治の安定した時代に居られた道元禅師とは異なった人間観、社会観があるのは当然と思われれます。

坪 井 俊 映

## 二 念仏行者法然

法然上人の教えの特色を知るに先立って、初めに知って頂きたいことは、法然上人は「いわゆる学僧」ではなく、念仏行者であるということです。各宗の祖師方について見ますと、天台宗の伝教大師、真言宗の弘法大師等はいづれもすぐれた名僧であるとともに学僧であって、多くの著作を残していられます。また、道元禪師にしても、日蓮聖人にしても同様であって、立派な著作を見ることができません。

これらの著作は主として祖師達が仏教を学び、また實際、厳しい修行を行って得られた体験を書物としてまとめて、弟子達や帰依者に与えられたものであります。この中には実に大部なものがありますが、法然上人にはそのような大部なものはありません。

『法然上人全集』なるものが編纂されていますが、その内容を見ますと、經典を講義されたときの手控書、説法された時の弟子の筆録、帰依者から尋ねられたときの返信の手紙、弟子達に随時語られた時の筆録と思われるもの等短篇のものばかりであって、他の各宗の祖師のごとく、自から進んで筆をとって、自己の考えをまとめて書かれたものはほとんどありません。

法然上人に、代表的な述作書といわれる『選択本願念仏集』という書物があります。これは上人に帰依していた九條

兼実（関白）の依頼により、かつて南都東大寺において講述された『浄土三部経釈』を基にして、述作されたものであります。これとても、この書物の内題である『選択本願念仏集』『南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先』の二十一字は自から筆をとって書いていられますが、その本文はすべて弟子達が法然上人の意をうけて筆録し、さらに弟子の証空が勘文をして出来上ったものであります。法然上人は自から進んであまり筆をとられなかったようです。

しかし、法然上人は当時の人々より「智恵第一の法然房」といって称讃され、また、自からは毎日聖経を読み、学業に励んでいられました。「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者（木曾義仲）花洛に乱れ入るとき、ただ一日聖教を見ざりき」といわれているように、毎日經典積書を繙いて、修学に励まれた人であって、学識の深い上人であります。自から筆をとって、自身の考えをまとめて一冊の書物にされる「いわゆる学僧」ではありません。

法然上人が文筆にすぐれた学僧でないということは、法然上人の滅後に、梶尾の明恵上人が著わした『摧邪輪』なる書物に云っています。「上人は深智ありといえども、文章をよくせず、よって自製の書記なし」と、

このように、法然上人は自から筆をとって書物を著わす学僧でないために、他宗の祖師方に比して、法然上人の真筆と

いわれるものが僅かしか残っていません。確実に上人の真筆として間違い無しと、学界で認められているものは、僅か四点しかありません。

その一は、熊谷入道蓮生れんせいに宛てた手紙であって、京都嵯峨、釈迦堂にあるものです。

二は、奈良の興善寺の仏像の体内から発見された手紙であって、正行房宛のものです。これは断簡であって、完全なものではありません。

三は、先ほど申しました『選択集』の内題と、「南無阿弥陀仏往生之業念仏為先」の都合二十一字であって、この原本は京都、盧山寺にあります。

四は、京都二尊院に所蔵される『七ヶ條起請文』の署名、「源空」の二字であります。

以上の四点であります。このほかに「伝法然筆」というものが沢山ありますが、いづれも十分な書誌学的研究の必要なものばかりです。この真筆の四点はすべて重要文化財に指定されていますが、全文揃った完全なものは熊谷入道宛の手紙のみであって、興善寺の正行房宛のものは断簡であり、盧山寺にある『選択集』は内題と冠頭標文の二十一字だけです。二尊院の『七ヶ條起請文』は「源空」という署名二字のみです。

現在、各宗派の開祖の真蹟が多く残っている中で、法然上

人のもものは、ただ四点しか残っていないということは、梶尾の明恵上人が「文章をよくせずよって自製の書記なし」と批評しているように、上人自身、自から筆をとって多くのものを御書きにならなかったということが知られます。法然上人は各宗派の祖師のごとく、いわゆる学僧ではなく、学識あり、智恵のすぐれた念仏行者であることを、先づ初めに知って頂きたいと思えます。

### 三 無師独悟の念仏

法然上人は浄土宗という新宗派を開創されましたが、日本における各宗派の開祖と異なり、上人には歴史的な伝灯相承がありません。

法然上人以前、日本に盛えた南都の六宗、平安の二宗のごときは、中国または朝鮮より高僧名僧が日本に渡来して教えを伝え、また、日本の学僧が中国へ渡って、彼の地において師範について教えを受けて帰国して、宗派をひらいていられます。栄西禅師の臨済宗、道元禅師の曹洞宗も同様です。ともに中国へ渡り、栄西禅師は虚庵懐敏より、道元禅師は長翁如浄より教えをうけて帰国して、それぞれ臨済宗、曹洞宗なる新宗派をひらいていられますが、法然上人にはこのようなことはありません。

法然上人は青年時代に南都に学ばれましたが、その後、五十八歳の時奈良東大寺に行かれたことと、晩年、流罪になっ

て讃岐国（香川県）に行かれ、のち、摂津勝尾寺に居られたこと等が、京都を離れられたことであって、道元禪師のごとく中国へ渡って教えを受けられたことはありません。ほとんど京都に止まっていられました。

法然上人は十五歳の時、叡山へ登って出家し、のち叡山黒谷の叡空上人のもとに隠遁して修学に励まれました。法然上人が浄土教に導かれたのは叡空上人が、恵心僧都の『往生要集』に造詣の深い学僧であったからです。法然上人は『往生要集』によって浄土教に帰入され、さらに善導が『観経疏』において説く、本願念仏一行専修説によって浄土宗を開創されたのであります。法然上人を浄土教に導いたのは叡空上人でありましたが、叡空上人は善導が説く本願念仏の教えには関係なく、また、法然上人が十五歳で出家されてより、叡山において学ばれた持宝房源光、肥後の阿闍梨皇円ならびに上人が南都において教えをうけられた蔵俊（法相宗）寛雅（三論宗）慶雅（華嚴宗）等の学匠は、いづれも善導の浄土教に縁のない人であって、ただ、中ノ川実範のみは律宗、真言に秀い出た学匠であると共に、浄土教にも関係があり、『念仏式』なる著作を出しています。これには善導をもって観念の念仏を説く人師としています。法然上人は中ノ川実範に教えをうけられましたが、それは善導浄土教ではなく、戒律の教えであります。

このように、法然上人が青年時代より教えをうけられた各宗の祖師の中には、善導浄土教に造詣の深い学匠はだれもありません。法然上人が求められたものは、末法悪世に住する悪業の衆生たる自身、それは戒定恵三学の器でない自己であり、観念の出来ない乱想の凡夫たる自身、——それを救う教えを求められたのであります。しかし、いづれの学匠も法然の志願に答えるものではなく、ついに上人は叡山黒谷に籠居して一切経を繙き、自身を救う教えを探求されたのであります。かくて、二十数年に亘る求道遍歴の末に見出されたものは、善導が『観経疏』において説く本願念仏一行往生説であります。この教えこそ、自身が永年求めに求めて止まなかった教えであるとして、善導が説く本願念仏の教えに回心帰入されたのであります。この時が承安五年、法然四十三歳の時であって、浄土宗では、この年をもって浄土開宗の年とします。

しかし、ここに問題があります。法然上人は書物によって、善導の本意は本願念仏一行往生説であると「さとら」れたことでもあります。しかし、善導の本意は法然が「さとった」ごとく本願念仏であって、それに間違がないと証明する人師は一人もありません。善導大師の著作はすべて五部九卷あって、『観経疏』のほか『法事讚』二卷『往生礼讚』一卷『観念法門』一卷、『般舟讚』一卷等のものがあります。

この書物を端的に見た場合、必ずしも法然上人のいうごとく、本願念仏の一行のみを説いていられません、『往生礼讃』では三心具足の五念門（礼拝、讚歎、作願、觀察、回向）をもって浄土往生の業とし、『観念法門』や『観経疏』においては観念と称名をもって往生の業とされています。その他に善導大師自身は戒法を厳守された方であり、塔堂の修復等のこともされています。

しかるに、法然上人は善導大師が説かれた五念門等の諸善根をかえり見ず、善導大師は本願念仏一行による浄土往生を説かれた方であるとされました。これは法然上人独自の理解であって、別言すれば独断的な理解であるといえましょう。事実、法然上人が晩年、叡山および南都の教団より念仏禁止を訴えられました。その理由の一は、この法然上人の善導理解にあるといえます。

しかし、法然上人は『観経疏』なる善導の著作によって証得された本願念仏は善導の本意であり、また阿弥陀仏の真意であると強い確信を持たれました。それは半金色善導の夢定中感得という靈感によります。法然上人はこの靈感によって、自身が書物によって自証した本願念仏の教えが善導大師および阿弥陀仏の真意であるという強い確信を得られたのであります。

かかる靈感というものは法然上人独自の宗教経験であっ

て、だれでも得られるものではありません。この宗教経験なるものは、法然上人が十八歳のとき、黒谷に隠遁されてより、三学（戒定慧）の器でない自己、および末法悪世に住する迷いの凡夫を救う教えを探し求めて二十数年間、求道遍歴されて、ついに得られたものであります。これは法然上人なればこそ得られた宗教経験であります。私達は法然上人に半金色善導の来現という靈感（宗教経験）を認めざるを得ません。

しかし、これは法然上人個人の宗教経験であって、中国の善導と法然上人との間に五五〇年の隔たりがあって、栄西禅師や道元禅師のごとく歴史的な伝灯相承というものはありません。この点より法然上人が説かれます本願念仏の教えなるものは無師独悟の念仏であり、浄土宗は無相承の宗派であるといえます。

実際、法然上人の念仏に対して、南都北嶺の仏教々団より念仏禁止を訴えた訴状には、法然の念仏による浄土宗の開創は無相承の宗旨であるといっています。

しかし、現今の浄土宗では、上記の法然上人の宗教経験を基にして本願念仏の教えを説き、「偏依善導」（ひとえに善導による）とあって、善導が説かれた本願念仏を祖述し、半金色の善導をもって阿弥陀仏の応化身なりとして崇めています。半金色とは下半身が金色なることをいい、これで以て、阿弥陀仏の応化身たることを示し、上半身が常人の法衣姿で

あるのは人間善導を示すものとしています。一人の人間の上に歴史的善導と阿弥陀仏の応化身たる善導を示すものが半金色の善導であります、浄土宗では善導大師は、つねに半金色の善導であります。

#### 四 現実直証の浄土教

されば、次に法然上人がなぜ念仏の一法一行のみを選ばれたかということを考えて見たいと思います。

法然上人の出られる以前においても、天台宗、真言宗、南都仏教において浄土教は盛えていました。これは雑修雑行の浄土教といわれるものであって、諸種の善根、功德ある行を修して浄土往生を願ったものであります。法然上人は、それらの多種多様な行の中より、念仏の一法一行のみを選びとり、善導の教えによって、本願という新しい意味をつけられました。されば、なぜ念仏の一法一行による浄土教を説かれたかというに、それは法然上人の説く念仏の教えが現実の直証にあるからであります。そして、当為的な人間を見るのではなく、現実社会において惑い迷う人間に人間の本性を見るからであります。それは、法然上人が出られた時代、社会が法然上人をしてかかる見方に立たしめたものと思えます。

浄土教も大乘仏教でありますから、「一切衆生悉有仏性」という人間に仏性の存在を認めますが、しかし、現実の人間はその仏性を汚し曇らせていて、開顕することは容易ではあ

りません。それで、汚がしているもの、曇らしているものが現実の私であるとして、とらえるのであります。この汚がしているもの、曇らしているものが煩惱であり、罪悪であります。

法然上人が現実の自己ならびに人間を、かかる煩惱のものの、罪悪のものと見るに至ったのは、法然上人出世当時の社会争乱によるものでありますが、現実の人間が煩惱的存在であり、罪悪的人間であるということは、八〇〇年前の法然当の人間も、今日の人間も変わっていません。口に平和をとえ、核兵器の禁止が叫ばれていますが、現実には核兵器の製造が行なわれています、世界のあちらこちらで闘争、戦争はたえまなく起っています。また私達の日常生活においても生存競争という闘争の中に生きて行かねばなりません。そこには「我欲」「我執」の生き方をしていて現実の人間を認めねばなりません。この人間個人の「我欲我執」がさらに大きくなりますと、民族我、国家我というものになって、他の民族を圧迫し、他の国を平定するようなことがおこります。これが生きている現実の人間の姿です。法然上人当時の保元、平治の乱は同族間における権力欲という我欲我執による見にくい人間闘争の姿であります。

人間は本来、仏性のあるすぐれたものであるかもしれませんが、現実の人間は我欲我執の固りであり、煩惱の人間であ

ると見られたのであります。法然上人はこれを自己自身の中に見出されて、「三学の器にあらず」「起悪造罪の凡夫」といわれています。これは天台宗の教えや禅の教えと異なるところであります。

法然上人は、このような自己自身に相應する教えを求めて一代仏教を学び、その中より念仏の一法一行を見出されたのであります。これを選択といいますが、これは機（器）に相應する教行を選びとることであって、機（器）を調熟（教育）して、教に相應せしめることではありません。

機を調熟することを説くものは天台宗の五時教判であります。五時とは華嚴時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時の五であります。初めの華嚴時とはお釈迦さまが悟りをひらかれた最初の三七日の間に説かれた教えをいうのであって、内容は『華嚴経』であるとしています。しかし、この教えを聞いた声聞や縁覚は能力が劣っているために理解できず、「聾のごとし」「啞のごとく」であったといわれます。そこで、程度をさげて鹿野苑において小乗教を説いて誘引されるとします。ついで方等時には大乘教、般若時においては空般若を説いて、弾訶し、淘汰して機根を整えられ、そして、ついに眞実の教を受ける能力ができたために、第五時の法華涅槃時において、出世本懐の教えである『法華経』を説かれるとされています。これは「聾のごとき」「啞のごとき」能力の劣ったも

のを誘引し、弾訶し、淘汰して、法華の教えを受けるに足る能力あるものに調熟（教育）することであって、教法に人間を相應せしめようとするのであります。丁度、大学に入学するために、小学校教育、中学校教育、高等学校教育をうけることと同じと考えればよいかと思えます。

法然上人の考えは、これとは全然異なり、現実の人間に相應する教法を一代仏教の中に探求されたのであります。そして見出されたものが本願念仏一行往生説であります。その現実の人間とは煩惱の固りである人間であり、罪惡の人間であります。そして、かかる人間の社会を經典に説く末法思想によって理解し、末法五濁惡世に住する煩惱具足の凡夫、または罪惡生死の凡夫とされたのであります。

この末法思想とは『大集経』等に説く三時（正法、像法、末法）思想によるものであって、仏教の衰退を説く歴史観であります。法然上人当時の人々は、これをお釈迦さまの予言とうけとり、歴史的事実を説かれたものとし、永承七年（一〇五二）をもって末法元年とする説も唱え出されました。そして、保元平治の乱はいまでもなく、僧兵の跋扈する姿を評して末法の惡世相であるとなりました。道元禪師は『正法眼蔵』において末法思想を説く正像末の三時の考えは方便の教えであるといつてとりあげていられますが、法然の浄土教は、かかる末法思想を背景として、現実の人間を煩

悩の凡夫、罪惡の人間と見るのであります。そしてかかる悪人、迷いの人間を救う教えは、ただ念仏の一法とみとするのであります。

## 五 信を基とする念仏

さらに、注意すべきことは、法然の浄土教は智慧を極める仏教ではなく、仏の教えに信順することを説く教えであるということです。

信心を重視することは法然浄土教の特色であって、法然門流のもの（浄土宗の二祖聖光、西山浄土宗の証空、真宗の親鸞等）はいづれも信心を重んじています。

それ以外のもの、譬えば中国における廬山流浄土教、慈愍流浄土教、禅淨合行の浄土教等には信心はあまり重視していません。日本にては天台浄土教（源信）真言浄土教等がありますが、法然浄土教ほど信心に注目していません。信心を重んずるのは法然浄土教の特色であって、真宗の親鸞聖人は、とくに信心往生を説きますが、その本をたづねると法然、善導の教えに在ります。

法然は「聖道門の修行は智慧をきわめて生死をはなれる」といつているごとく、聖者の教え、自力の教えといわれる天台、法相等の聖道門は修学によって三諦円融の道理や三界唯識の原理をさとって（智慧を極める）生死を解脱する教えであるといわれています。これに対して「浄土門は愚痴に還り

て浄土に生るとしるべし」と説かれています。これは智慧を極める修学をすてて、ただ仏の教えにひたすら信順することを説かれたものと思われます。そしてさらに「年来習いたる智慧は往生のためには用にもたたず、され共習いたる（甲斐）かひに、必ずかくのごとく知りたるははかりなき事なり」といつていられます。

これは、法然上人が永年のあいだ叡山にて修学して得られた学識、智慧は浄土往生のためには用をなさないとして、捨てられることではありますが、しかし、次の言葉に「され共習いたる（甲斐）かひに必ずかくのごとく知りたるははかりなき事なり」といわれていますように、「智慧は往生のためには用をなさない」と知ったのは、修学（習いたる甲斐）によって知ることができたのでありとされるのであります。

このことは智慧を極める修学を修学によって不用とすることであります。いい換えますと、これは修学によって修学を不用として否定することであります。そして、その否定する境地を「愚痴に還る」といわれています。先きに聖道門に対して「浄土門は愚痴に還りて浄土に生る云々」といわれたのはかかる境地をいわれたものと思ひます。

この法然上人のいわれる「愚痴に還る」とは「無学の愚直者」「阿呆になる」ということではなく、大乘菩薩道の修学修行について、修行する自己の能力に懷疑をいだき、自身の



能力に限界を感じて、自力の修学修道を放棄して、己れを空しくして仏の教えに信順することであり、己れを空しくして仏に信順することを「愚痴に還える」といわれたのであります。これは大乘菩薩道自体が自己内省をして、自己自身を超えることでないかと思えます。大乘仏教が説く菩薩道には菩薩道自己自身を反省内省することは見られないようですが、法然上人が愚痴に還りて仏に信順する浄土教を説いたという事は、大乘菩薩道を百尺竿頭さらに一步進めたものと思われるのが出来ると思ふのであります。ここに信心を基とする法然浄土教があると考えるのであります。

まだ、いろいろお話を申したいことがありますが、予定の時間がまいりましたので、これで失礼さして頂きます。御清聴を感謝します。

（本稿は、昭和五四年九月一三日に耕雲館で行なわれた講演テープをもとに、坪井俊映先生が加筆されたものである。）